

日光へようこそ

Welcome to Nikko

2020年7月18日（土）～8月30日（日）

まだあなたの知らない日光がここにある。

絢爛な社寺と豊かな自然を擁する日光は、明治時代に訪日外国人に避暑地としての魅力を見出されたことにより、観光地としての道を歩み始めます。1999年には、りんとうじ 輪王寺・ふたらさんじんじゃ 二荒山神社・とうしょうぐう 東照宮、いわゆるにしゃいちじ 二社一寺が世界遺産に登録され、世界的な観光地として知られるようになりました。

しかしながら、日光の魅力は二社一寺と奥日光だけにとどまりません。2006年、旧・日光市はいまいち 今市市・足尾町・藤原町・栗山村と合併し、新しい日光市となりました。とりわけ、今市は日光街道の20番目の宿場町として栄え、さらに東照宮へと伸びる杉並木があることから、まさに日光への「玄関口」とも言えます。

当館は1997年の開館以来、日光の社寺を描いた水彩画、いわゆる「おみやげ絵」をはじめ、近・現代の画家たちが描いた日光の風景画の収集に努め、その結果、約130年間の日光の風景を俯瞰できるコレクションが形成されました。本展は、今市から奥日光までの道中を、当館が所蔵する風景画でたどることにより、日光の魅力により深く迫るものです。

■ 開催概要

※新型コロナウイルス感染症の状況により、会期等が変更になる可能性があります。

展覧会名	日光へようこそ Welcome to Nikko
会期	2020年7月18日（土）～8月30日（日）
休館日	毎週月曜日（ただし8月10日は開館）、8月11日（火）
開館時間	9時30分～17時（入館は16時30分まで）
入館料	一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料 ※（ ）内は20名以上の団体割引料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料 ※第3日曜日「家庭の日」（7月19日、8月16日）は、大学生は無料
主催	公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館／日光市／日光市教育委員会

■ 展覧会構成 (作品はすべて小杉放菴記念日光美術館蔵)

I. 日光への玄関口・今市

日光に隣接する今市は、江戸と日光を結ぶ日光街道、勅使が東照宮に幣帛^{へいはく}を奉納するために通行した日光例幣使街道^{れいへいし}、今市と会津若松を結ぶ会津西街道が交わる宿場町として大きく繁栄しました。まさに、日光の玄関口とも呼べるこの地ですが、そう呼ぶのに欠かせないさらなる存在が「杉並木」です。

この杉並木は、徳川家康の忠臣・松平正綱が亡き將軍の恩に報いるために1625年から植栽を始めたもので、東照宮の神領(領土)であった今市を中心に、先に挙げた3つの街道に植えられました。明治期に入ると、この整然とならぶ杉並木は「美」の対象となり、洋画家たちがこぞって訪れ、この風景を描いたのでした。

この章では、杉並木を中心に今市を題材とした作品をご紹介します。



画像1 吉田 博《杉並木》
1894-1899 (明治 27-32) 年頃

II. 門前町・鉢石^{はつし}

今日、杉並木を抜けると、二社一寺へと伸びる坂道にたどり着きます。土産物屋や飲食店が建ち並ぶこの一帯は、日光街道の最後の宿・鉢石宿があり、二社一寺の門前町として賑わいました。

この章では、今とはまた異なった趣を見せる130年前の門前町をご覧ください。



画像2 TABUCHI《日光駅前風景》



画像3 三宅克己《日光》1896 (明治 29) 年

Ⅲ．いのりの地・二社一寺

坂道を登り切ると、朱塗りの神橋しんきょうが私たちを迎え入れます。「山内さんない」と呼ばれるこの一帯は、輪王寺・二荒山神社・東照宮のほか、小さな社寺が点在する、いわば「いのりの地」として知られ、多くの参拝者が訪れました。

明治期の日光の観光地化の過程で生まれたのが、「おみやげ絵」でした。「おみやげ絵」とは、外国人観光客向けに描かれた日光の社寺の水彩画のことで、小杉未醒みせい（放菴）、五百城文哉ほうあん いおきぶんさいをはじめとする多くの画家が手がけ、生活の糧としていました。

その一方、日光を訪れた外国人画家は、絢爛な寺社よりも、自然の中に鎮座する小さな社や、参拝に訪れる人々に惹かれ、それらを生き生きと描きました。

日本人画家と外国人画家のまなざしの違いをお楽しみください。



画像4
Shusen 《神橋》



画像5
ロバート・ウィアー・アラン
《陽明門》1907年

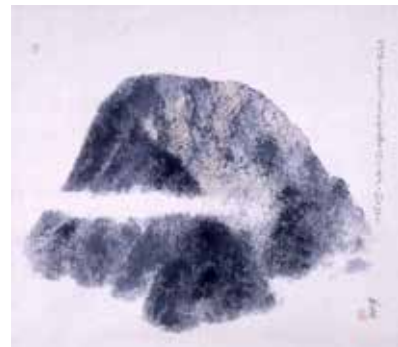
Ⅳ．豊かな自然・奥日光

豊かな自然を擁する奥日光。二社一寺を含め、この地は日光国立公園に指定されていますが、そもそも国立公園の制度は、1911年、当時の日光町が帝国議事に請願したことに端を発しています。

華嚴の滝、中禅寺湖、男体山などの風景は、古くから浮世絵版画の題材となりましたが、明治期に入ると、画家たちは極端なデフォルメを施した名所絵的視点から離れ、自らが感興を覚えた風景を描くようになります。

美しい風景に魅了された画家たちは日光を訪れ、その風景を描きましたが、同じ場所を題材にしたとしても、季節や天気、画家の視点や筆致によって、その表情は大きく変化します。

画家の心を揺るがした風景を描いた作品をならべ、画家の視点や筆致から、新たな奥日光の魅力に迫ります。



画像6 小杉放菴《関東第一山》
1933（昭和8）年頃



画像7 入江 観《湖畔晩夏》2015年

■ 主な出品作家

小杉放菴、五百城文哉、石井柏亭、吉田 博、三宅克己、武内鶴之助、入江 観

■ 広報用画像

本リリース掲載の作品図版を、本展広報用画像としてご提供いたします。図版に付した1～7が図版番号です。ご希望の場合は、展覧会担当までメールにてお申し込みください。その際、会社名／雑誌等名／ご担当者名／連絡先／希望画像の番号を明記してください。

■ 次回展予告

素描礼讃 岸田劉生と木村莊八
9月5日（土）～10月25日（日）

■ 本展に関するお問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館
〒321-1431 栃木県日光市山内 2388-3
Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201
担当学芸員：清水友美
E-mail: shimizu-tomomi@khmoan.jp